

馬鈴薯（きかくしょ）を持ってこい！

梗概

CCB テレビの脚本コンクールに入賞した江藤一（29）は、同期の前田華（32）とともにプロットライターとして企画書を書く日々を送る。

脚本家デビューを夢見る江藤だったが、現実は厳しく、企画書作りはほぼノーギャラ。プロデューサーの石毛（40）に都合よく使われているのを感じつつも、立場の弱さから何もいえずにいる。

企画書で成果を出さなければ、またコンクール生活に逆戻り——そうした状況に焦りを抱く中、江藤の企画書がようやく石毛の目にとまる。

しかし、江藤の企画はベテラン脚本家の小早川（39）に横取りされてしまう。小早川は石毛のお気に入りであり、上に取り入ることで要領よく仕事を得ていた。

江藤はそんな現実を目の当たりにし、思い描いていた脚本家像とのギャップに戸惑いを覚える。そうした中、今度は華の企画書が石毛の目にとまる。

しかし、華の企画はコンクール作品から盗用したものだ。気づいた江藤が華に問いつめるも、華は「こうでもしないとの上上がれない」と開き直る。

結局、華の企画はドラマ化され、大ヒットを飛ばす。盗作も表沙汰にはならず、華は念願だった脚本家デビューを叶え、華々しい舞台に立つ。

その後も江藤は愚直に企画書を書き続ける。見かねた華は、同期のよしみから新作の共同執筆を提案するが、江藤は華へのわだかまりから拒否し、最後のチャンスを棒にふる。

江藤は脚本家の夢破れ、生活は振り出しに戻る。書き溜めた企画書の数々を処分し、筆を絶つことで、江藤は夢の終わりを自ら受け入れる。

登場人物

江藤一 (29) プロットライター

前田華 (32) プロットライター

石毛 (40) プロデューサー

小早川 (39) 脚本家

正田 (30) 役者志望

佐々岡 (51) 朝霞ヴィンヤードのオーナー

野村 (38) ワインのディストリビューター

西山 (42) 灰白ワイナリーのオーナー

福原遥 (27) 役者

教室教室の講師

脚本教室の生徒

テレビタレント

テレビ局社員

居酒屋店員

テロップ画面:

企画書は紙切れ一枚だが、それは血と汗の結晶である。本作はその結晶を「見える化」する意図から、企画書を馬鈴薯として表現した

EXT. 江藤のアパート-朝

夏の到来を思わせる眩しい日差しがベランダを照らす。

EXT. 江藤のアパート-ベランダ-朝

プランターが並び、程よく枯れかけた葉や茎が風に揺れている。

土の表面には細かなひび割れがあり、所々土が盛り上がっている。

ベランダの風景に重なって、以下の SUPER が表示される。

SUPER:

書斎

江藤一（29）、軍手をはめてしゃがみ込み、真剣な顔でスコップを慎重に差し入れる。

江藤、根元をつかんで茎をそっと引き上げる。

茎に連なるように、複数の馬鈴薯が土の中から顔を出す。

江藤、軍手を外して素手で土を払い、連なった芋の中から形のいい一つを選び取る。

アップで映る馬鈴薯に重ねて、以下の SUPER。

SUPER:

企画書

江藤、馬鈴薯の感触を手のひらで確かめ、

江藤（小声で）

よし

カメラがベランダから空へパンしていく。

初夏の青空にタイトルロールが映し出される。

TITLE OVER:

馬鈴薯（きかくしょ）を持ってこい！

EXT. 都心-朝

高層ビル群の中でもひととき目を引く、ガラス張りの巨大な建物がそびえ立つ。

SUPER:

CCB テレビ本社

INT. テレビ局-エレベーターホール-朝

江藤、入構証をぶらさげ、緊張した面持ちで降りてくる。

手には馬鈴薯。

入念に洗われており、土一つついていない。

INT. テレビ局-制作部フロア-朝

壁一面に貼られたドラマ企画のポスターと、打ち合わせ中のスタッフたちの声が飛び交う。

会議室のガラス越しには、PC と睨めっこする制作陣の姿。

江藤、石毛の席の前まで歩み寄る。

だが、席は空いている。

江藤、おどおどしている。

社員、気づいて、

社員

何か？

江藤

あ、石毛さんはいらっしゃいますか？

社員

ああ、石毛さん？ 今、打ち合わせ入ってますよ

江藤

あ、はい。どれくらいで戻られますか？

社員

15分か20分くらいかな

江藤、両手に抱えた馬鈴薯を少し持ち直す。

社員、その手元を一瞥して、

社員

それ、預かりましょうか？

江藤、周囲に目をやる。

石毛のデスクや近くの棚には、他の人が持ってきたらしい馬鈴薯が、いくつも無造作に積まれている。

江藤、そこかしこに乱雑に置かれた馬鈴薯を見て、

江藤

あ、いえ

軽く会釈し、その場を離れる。

INT. テレビ局・自販機前のベンチ-朝

江藤、少し落ち着こうと腰を下ろす。

両手の上に馬鈴薯をそっと乗せ、じっと見つめる。

INT. テレビ局－会議室（回想）-昼

会議室のテーブルを囲んで座る数名の若手たち。

江藤、前田華（32）ら、脚本コンクールの受賞者たちだ。

手元には配布資料と入構証。

テーブルの奥に座るのは、制作部プロデューサーの石毛（40）。

石毛、淡々とした口調で話す。

石毛

改めておめでとう。今回、コンクールで選ばれた皆さんには、うちのドラマ開発チームの一員になってもらいます

一同、固唾を呑んで聞き入る。

石毛

といっても、最初から脚本を書いてもらうわけじゃなくてね。まずはプロットライターとして、企画書やプロットを書いてもらいます

石毛、一人ひとりの顔を眺める。

石毛

通る企画を書くのは大変だけど、それが最初の仕事です。ここで結果を出せば、次のステップに進めます。期待しているよ

受賞者たち、小さくうなずく。

江藤も、緊張と少しの期待を抱えながら、配られた入構証を見つめる。

INT. テレビ局・自販機前のベンチ（回想から戻る）

江藤、両手に馬鈴薯を抱え、所在なさげに立っている。

行き交うスタッフの喧騒。

と背後から声。

声（OFF）

江藤くん？

江藤、顔を上げる。

華が立っている。

華

江藤くんも？ 呼ばれたんだ

江藤

あ…うん

華

石毛さんは？

江藤

席、外してるみたいで

華、江藤の手のひらの馬鈴薯を見下ろす。

華（ふっと微笑んで）

見せ合いっこしようか

INT. テレビ局・食堂-朝

江藤と華、向かい合って座っている。

江藤の手のひらには、華が持ってきた、土まみれでごつごつとした馬鈴薯。

華もまた、江藤の小綺麗な馬鈴薯を手のひらに乗せ、見つめている。

江藤（じっと観察し）

…

華

どう？

江藤、少しもぞもぞして目を上げる。

江藤（ぼそりと）

…いいと…思います

華（疑う）

ほんと？

江藤

いや、今性のあるテーマだし、題材の切り取り方も前田さんらしくて…

華、笑いながらも肩の力を抜く。

華

ほんとはもう少しブラッシュアップしたかったけど…

華、改めて江藤の馬鈴薯を見つめ、

華

でも江藤君、やっぱすごい。すごく技術があるのが伝わってくる。アイデアをうまく形にしてるし、全体にまとまりがあるから読んでて安心する…さすがだよ

江藤、照れながらも嬉しそうに少し笑う。

華、両手を差し出し、江藤の馬鈴薯を大事そうに返す。

華

しっかり読ませていただきました

江藤、恐縮して受け取り、自分の馬鈴薯をテーブルにおくと、江藤も両手を添えて馬鈴薯を華に返す。

江藤の指先に、華の馬鈴薯の土が付着している。

江藤、その土を払い除けず、どこか愛おしいそうに見つめる。

INT. 同・廊下-昼

江藤と華、廊下の壁際に立っている。

華（ぼそりと）

ここ最近、企画書しか書いてないから、脚本の腕なまってるかもなあ

江藤（苦笑して）

…確かに

華、ため息を吐きながら遠くを見る。

華

いつまで続くんだろうね、これ

江藤、黙り込む。

廊下を行き交う社員が、二人に軽く会釈して通り過ぎる。

江藤と華も頭を下げ、恐縮した面持ち。

華

…私的にはさ、アイデア捻り出して、企画書にするまでが一番時間かかるの
に、もらえるのは交通費だけで、ノーギャラだもん

江藤

…

華

推しに貢がなきゃなのに…

華、またため息をつく。

江藤、困ったように笑い、

江藤

ブレイクスナイダーのビートシートでいうと、『死の気配』的な…

華、きょとんとした顔をする。

江藤、少し照れながら説明を続ける。

江藤（ぎこちない口調で）

コンクール挑戦が一幕目で、受賞がミッドポイントなら、今は二幕後半の、一番暗くて苦しいところ。ノーギャラで、タイムリミットもある。期限はせいぜい一年…結果を出せないと、またコンクール生活に逆戻り…焦るけど。でも、そこを抜けたら…なれるんじゃないかな…プロに

江藤、うつむく。

華、そんな江藤を見つめ、

華（苦笑しつつも楽しそうに）

江藤君って、ほんと好きだよ。三幕構成

江藤もつられて笑みがこぼれる。

そこへ、石毛が大量の馬鈴薯を詰めた網袋を肩に担ぎ、足早に近づいてくる。

袋の口から大小さまざまな馬鈴薯がいくつも見えている。

二人、慌てて姿勢を正す。

華

お疲れさまです！

江藤

お、お疲れさまですっ

石毛、あごをしゃくって応える。

石毛

おう！

華、手に持った馬鈴薯を見せる。

華

企画書、書いてきました

石毛

ありがとう。あとで読ませてもらうよ

石毛、網袋を担ぎ直すと、中から馬鈴薯がいくつか床に転がり落ちる。

石毛は気にする様子もなく、そのまま歩いている。

江藤、慌ててしゃがみ込み、落ちた馬鈴薯を拾い集める。

華、石毛へ駆け寄って、

華

持ちます！

石毛

悪いね

華、石毛から網袋を受け取る。

江藤、拾った馬鈴薯を胸に抱える。

二人、急いで石毛の背中を追う。

INT. テレビ局-制作部フロア-昼

石毛、制作部のフロアに入ると、そのまま自分のデスクへ向かう。

江藤と華、あとに続く。

石毛、椅子を引いて腰かけると、モニターに目をやりながら二人に軽く振り向く。

石毛

そこらへんおいといて

華

あ、はい

華、重たそうに網袋を下ろし、机の横に置く。

江藤と華、持参した馬鈴薯をデスク横にそっと置く。

石毛

企画書、しっかり読ませてもらうよ

華、江藤

よろしく申し上げます

石毛

あ、それと。悪いんだけど、今日はお二人に頼みたいことがあって

石毛、足元のダンボール箱を開ける。

中には大量のポテトチップの袋がぎっしり詰まっている。

その映像に重なって以下の SUPER。

SUPER

脚本

石毛

これ、全部コンクールの応募作品。下読み頼まれちゃってさ

石毛、一番上の袋を無造作につかみ、封を開ける。

中からポテトチップを一枚取り出し、バリッと食べる。

石毛、机に置かれた評価シートに赤ペンで×印をつける。

続けて、さらに別のポテチの袋を手取る。

それは他よりも明らかに膨らんだ、大入りのポテチ。

今度は袋を開けることなく重さを測るように持ち上げ、

石毛

枚数オーバー

再び評価シートに×印をつける。

江藤と華、その様子を見守る。

石毛

会議室、空いてるからさ。ホン、読むの手伝ってくれない？

石毛、また一枚食べ、淡々と×印を重ねていく。

INT. テレビ局-会議室-昼

がらんとした会議室。

江藤と華が横並びに座っている。

足元にはポテトチップの袋が詰まったダンボール。

二人、ポテチを食べている。

江藤、ポテチを一枚口に運び、じっくりと味わう。

ポリ…ポリ…と音が静かに響く。

華

ねえ

江藤

え

華

…一枚しか読んでなかったよね。石毛さん

江藤

…うん

華

落とされた…のかな？

江藤

…たぶん

二人、また黙ってポテチをかじる。

華

ノーギャラだよ、これ

江藤

…たぶん

INT. 江藤の部屋-玄関-夜

江藤、くたびれた様子で帰宅する。

スマホから LINE の着信音が鳴る。

江藤、靴を脱ぎながらスマホを覗く。

LINE 画面に石毛からのメッセージ。

「お疲れ。今日は助かったよ」

江藤、文字を打つ。

「こちらこそありがとうございました」

すぐに返事が来る。

「明日もお願いできない？」

江藤、無表情で打つ。

「自分でよければやらせてください」

江藤、深いため息をつく。

江藤、スマホを操作し、別のトーク画面を開く。

相手のアカウント名は「正田」。

プロフィールアイコンは、舞台衣装を着てキメ顔の自撮り写真。

江藤、文字を打つ。

「急にごめん。プロデューサーに頼まれ事されて明日のバイト、シフト入れなくなつた。大丈夫なら代わってほしい」

すぐに着信音。

「完全に脚本家じゃん！😓💧」

続けて。

「明日は俺に任せろ👌😁」

江藤、画面を見て少し笑い、文字を打つ。

「ありがとう」

さらに正田から。

「いいってことよ。デビューが決まったら俺を主演にしろよ☹️🍷🌟」

江藤、弱々しく笑う。

INT. テレビ局-会議室-翌日

テーブルの上に、ポテチの袋と段ボール箱が雑然と置かれている。

江藤と華、並んで座り、無言でポテチを咀嚼している。

江藤、新しい袋を手取る。

封をあけた瞬間、黒焦げのポテチが顔を出す。

江藤（あ然とし）

...

江藤、眉をひそめ、一枚つまんで口に運ぶ。

江藤、咀嚼しながら小さくため息をつき、手元の評価シートに目を落とす。

江藤、ペンを取り、「×」をつけかけるが——その手が止まる。

迷いを浮かべたまま数秒、固まる江藤。

意を決したように、もう一枚、黒焦げのチップスを口に放り込む。

以下、カットバック

江藤、ざく切りのポテチをゆっくりと味わう。

江藤、評価シートに審査評を書き込む。

江藤の声 (V.O.)

どんでん返しの伏線が巧みで、映画『ステイキング』を連想しました。しかし、事件の真相に至るまでの展開において、ところどころキャラクターたちの行動原理に不明瞭な点があり、それがストーリーの傷になっているように感じます

江藤、次のポテチを食べる。

袋の中を漁り、何枚もポテチを口に放り込みながら、どこか納得のいかない表情を見せる。

江藤の声 (V.O.)

起が長く、ストーリーの立ち上がりが遅過ぎます。回想の挟み方など、構成面での不備が目立ちます。一方、キャラクター造形は巧みで、主人公とヒロインとの関係性にもヒキがあり、最後まで読ませる力を感じました

隣で華も、黙々とポテチを食べている。

華の声 (V.O.)

キャラクター同士の距離感がリアルで、特に放課後の教室での何気ない会話にぐっときた。恋愛や友情が表に出すぎず、思春期特有の不安や期待がにじんでいて共感しやすい

華、新しい袋を開け、じっくりとポテチを味わう。

華の声 (V.O.)

親への愛情と憎しみが入り混じった複雑な感情が、すごくよく伝わってきた。簡単に断ち切れない関係性のしんどさがリアルだった。ただ、主人公が最後に下す決断に、もう少しリアリティが欲しかったかもしれない。感情の積み重ねはすごく丁寧だったから、なおさら惜しい

江藤、次の袋を開ける。

中から現れたのは、調理前の「生のジャガイモ」。

瞬、目を丸くする江藤。

江藤、恐る恐る一口かじる。

顔をしかめ、無理やり喉に流し込む。

江藤の声 (V.O.)

どんなものをどんなふうを書くか、その基本が守れていないように感じます。

内容はともかく、技術の痕跡が見られません。料理でたとえば、生の素材の

ままテーブルに出しているようなもので、面白い脚本かどうかは、それからだ

と思います

華、ポテチを開ける。

ポテチを口に運びながら評価シートに向き合う。

華の声 (V.O.)

主人公の芯の強さは『梨泰院クラス』のパクセロイっぽくて、物語を引っ張る力になっている。その信念の背景がもう少し描けたらもっと深みが出そう。キャラの熱量はしっかり伝わってきた

華、さらに食べる。

華の声 (V.O.)

芸人として売りたい気持ちと、相方との距離感に悩む主人公の葛藤がすごく人間くさくて共感できた。ネタを書いているシーンや舞台裏の描写もリアルで、作者自身の観察力を感じた。ただ、後半の展開が少し駆け足で、主人公の心情変化がやや置いてけぼりになった感もあった

江藤、封をあける。

ホットチリ味のポテチが出てくる。

江藤の手にスパイスがつく。

江藤の声 (V.O.)

『花束みたいな恋をした』の拙い模倣に見えました。あの作品の長所であるリアルな会話と感情の機微が欠けていて、表面的な恋愛描写に終始しています。構成も散漫で、何を伝えたいのかがぼやけています。もっとテーマから逆算する必要があるように感じました

華、封を開ける。

こちらもホットチリ味のポテチ。

大量に入れられたホットチリのスパイスが華の手にべっとりをつく。

華の声 (V.O.)

恋愛要素って入れるだけで共感できるし、キャラが人間ぽくなるから、書きたくなる気持ちはすごくわかる。でも少し効かせすぎたスパイスって感じがする。主人公の寂しさや孤独を描くなら、恋愛を匂わせるくらいでも十分だったはず

華、ペンを置く。

隣の江藤も、ペンをおく。

江藤、机の隅に置いてあった胃薬を取り出す。

SUPER:

目薬

江藤、無表情のまま胃薬を飲み込む。

カットバック、終わり

机の上のポテチをすべて完食した二人。

二人、背もたれに体を預け、ぐったりとしている。

江藤、少し太っている。

華が椅子を引き、立ち上がる。

華

…私、これからチューターのバイトだから

江藤

あ、うん

華

じゃ、お先

江藤

うん

華、部屋を出ていく。

江藤、一人残され、机の上の評価シートをぼんやりと見つめる。

INT. テレビ局・デスク - 夜

石毛、デスクでスマホをいじっている。

江藤、空の段ボール箱と抱えてやってくる。

少し疲れた顔で、評価シートと箱をそっとデスクに置く。

江藤

…あ、すみません

石毛、スマホから顔を上げて江藤を見やる。

石毛

ん

江藤

あ、終わりました

石毛、柔らかく笑い、資料を片付けて立ち上がる。

石毛

お疲れさん。じゃあ、今から飯でもいこっか？

江藤 (戸惑い)

…？

INT. 焼き肉屋-外観-夜

賑わう通り沿い、小さな赤提灯が灯る焼き肉屋。

INT. 焼き肉屋-店内-夜

江藤と石毛、奥のテーブル席に座っている。

テーブルの上には煙を立てる七輪と、焼かれた肉皿、ジョッキに入ったビール。

石毛

どんどん食べて

江藤、遠慮がちに肉を箸で取る。

石毛、上着のポケットから馬鈴薯を取り出し、テーブルの上にそっと置く。

江藤が先日提出した馬鈴薯だ。

江藤

…？

石毛、にこりと笑いながらじゃがいもを指で転がす。

石毛

君が書いてくれたこの企画書なんだけど、周りに見せたらかなり感触よくてさ

江藤

え？

石毛

すごくよかったよ。『黄金色の思い出』。テーマのギャンブル依存症はキャッチーだし、依存症施設にいる父親が絶縁状態の一人娘の交流するのも、ターゲット層に受けそうだ。何より、君独自の視点にキレがある

江藤、恐縮する。

石毛

この企画、上に通せば、たぶん採用されるよ

江藤、驚いたように目を見開き、頬が少し赤くなる。

喜びがじわじわと顔に広がる。

江藤

あ、ありがとうございます！

江藤、舞い上がった拍子にうっかりビールジョッキを倒してしまう。

白い泡がテーブルに広がる。

江藤（慌てて）

す、すみません！

石毛（店員を呼びながら）

お姉さん！ お手拭き！

店員が素早くお手拭きを持ってくる。

石毛、お手拭きを取り、さっとテーブルを拭く。

江藤

あ、自分でやります！

石毛

いいからいいから

石毛、拭き終わって手を止める。

わずかな沈黙のあと、空になったジョッキを江藤の方へ静かに押し戻す。

石毛

それで、もし企画が通ったらなんだけど…今回はさ、小早川くんに脚本を任せようと思って

江藤

え…

江藤の表情が一瞬にして曇る。

石毛、その様子を見て声を少し柔らかくする。

石毛

彼女、ベテランだし、上からの評判もいいから、彼女が書くって言えば通りやすいんだよ、企画

江藤、俯いて小さくうなずく。

石毛（間を置いて）

大丈夫。これは君の企画だから、その点はちゃんと評価するし、上の者にも僕がいておく。慌てずに、一步ずつ進んでいこう

江藤、小さく「はい」と返す。

湯気の立つ七輪の火が、二人の顔を静かに照らしている。

INT. ファミレス-ホール-翌日-昼

忙しそうに客席を片付ける江藤と正田。

正田は無口に食器を重ね、江藤は黙々と紙ナプキンを補充している。

INT. ファミレス-更衣室-翌日

江藤、小さな菓子パンをちぎって口に運ぶ。

隣で正田、スチールのロッカーにもたれて缶コーヒーをゆっくり飲んでいる。

正田

…上げて落とされたか。いちばん来るパターンだな

江藤、小さくうなずき、視線を落とす。

正田

…にしても、少し太ったんじゃないか？

江藤、菓子パンを見つめながら苦笑い。

江藤

…ストレスかも

正田をちらりと見て、缶コーヒーだけなのに気づく。

江藤

食べないの？

正田

デニーロ・アプローチ。いや、亮平アプローチか。今度のオーディションに向

けて

江藤、弱々しくも少し笑う。

正田

それで、小早川だっけ？ 脚本担当すんの

江藤、無言のままうなづく。

正田

そいつの書いたドラマ、見たことあるわ。つまんねーラブコメ

江藤

…

正田

なんであんなのしか書けないやつに仕事が回るんだ？ 原作好きだったから見

たけど、まあ、クソだった

江藤、苦笑する。

正田

原作改悪して無理やり恋愛要素付け足したクソドラマ。あれじゃ原作が台無し

だよ。ほんと、クソだったからな

江藤（笑う）

わかったって

正田、缶コーヒーを飲み干し、缶を軽く振る。

正田

でもさ、企画書のギャラはもらえるんだろ？

江藤、目を伏せたまま返事をしない。

正田（少し間を置いて、察したように）

…ガチで？

江藤

…うん

正田

いや、金よこせってちゃんといたほうがいいって

江藤

…でも、おわりだから

正田

え

江藤

…プロデューサーに嫌われたら

正田、眉をしかめて江藤を見る。

INT. テレビ局・会議室-翌日

江藤と華、今日も机の上にポテトチップの袋をいくつか並べ、黙々と食べている。

江藤、ポテチの袋を開ける。

中をのぞいて、無言のまま一枚取り出す。

ホットチリパウダーがかかったポテチが出てくる。

華、ポテチをちらりと見て、

華

また恋愛もの？

江藤、口元で苦笑いしながらうなづく。

華

飽きるっていうかさ。悪くない脚本でも、似たり寄ったりの話を連続で読むと
なんか評価下がるんだよね

江藤、一枚口に運びながら、小さく息を吐く。

江藤

…そういう意味で、コンクールにも運はあるかも

華、手をウェットティッシュで拭きながら。

華

…でも、よかったじゃん

江藤、意外そうに顔を上げる。

江藤

え？

華

一歩進んでさ

江藤、少し戸惑いながら黙る。

華（小さく寂しげに）

私なんかには比べたらさ…江藤くん、すごいじゃん

江藤

…

江藤、テーブルのペットボトルを手に取り、何か言いかけて横目で華をちらり

と見る。

華、袋から串に刺さったハリケーンポテトを取り出す。

江藤、華が手にしたハリケーンポテトに気づき、思わず二度見する。

江藤

え？

華、ハリケーンポテトを眺め、

華

ループものかな？

江藤、目を輝かせて身を乗り出す。

江藤

…前田さん。ちょっと見せて

江藤、ハリケーンポテトを受け取り、食い入るように観察する。

江藤（息をのむように）

これ、やばいよ…『ラン・ローラ・ラン』とか『オール・ユー・ニード・イズ・キル』のループ構造に、『切腹』の扇状回想法を重ね合わせた構成になってる…

華、静かに江藤を見つめる。

江藤（興奮気味に）

やばい。これ、大賞でしょ

華

…そう？

華、手もとにあるハリケーンポテトの袋を見つめる。

× × ×

ドアが開き、石毛が入ってくる。

江藤と華、慌てて立ち上がる。

石毛

ふたりとも、お疲れさん

江藤、華

お疲れさまです

石毛

今日さ、これから六本木でドラマの打ち上げあるんだけど…見学がてら、ついてくる？

江藤と華、一瞬顔を見合わせる。

INT. 六本木・ダイニングバー（貸切） - 夜

華やかな都会の夜景を望む大きな窓。

落ち着いた間接照明が店内を柔らかく照らし、シャンデリアがきらめく。

立食パーティー形式で、芸能人や制作スタッフが笑顔で談笑。

時折、笑い声や乾杯の音が響く。

江藤と華は、端の壁際でぎこちなく身を縮めながら立っている。

周囲の華やかな空気に圧倒されている。

華（小声でぽつりと）

…いま、福原遥と目があつた

江藤（驚いて）

え？

江藤の視線の先に福原遥。

華（眩くように）

てか、みんな、顔小さすぎない？

小早川桐子（39）が、ワイン片手に人気芸能人たちと談笑している。

彼女は明るい笑顔で、その場の中心にいる。

石毛が小早川に近づく。

小早川は石毛に笑顔で軽くボディタッチし、二人は親しげに会話を交わす。

石毛が合図を送り、小早川はちらりと江藤と華の方を見る。

石毛と小早川、江藤らのもとへ歩み寄る。

江藤ら、緊張が高まる。

石毛（紹介し）

企画書を書ってくれた江藤君。知ってると思うけど、こちら小早川君

江藤（声を震わせ）

よ、よろしくお願ひします！

小早川、そっけない態度で江藤を見る。

石毛

無事企画書が上に通ったから、今彼女にホンを書いてもらってるところだ。完成したら君にも読んでもらって、いろいろ意見を聞かせてほしい

江藤、恐縮して視線を伏せる。

小早川（笑いながら）

石毛っちさー、そんなことよりたまには私のオリジナルも通してよ

石毛は苦笑いしながら応じる。

そこへ、一人の若手タレントが駆け寄る。

タレント

小早川さん、次は俺にいい役くださいよ！

小早川

どうしようかなー。シャンパン奢ってくれたら考えてあげるかも。最近さ、サロンにハマっちゃってて

タレント

サロンでも何でも奢りますから！

タレント、満足そうに去っていく。

小早川、カバンをごそごとと漁る。

小早川

これ、私の渾身のオリジナル企画だから

小早川、カバンから馬鈴薯を一つ取り出して、石毛に見せる。

小早川の手のひらにはピンポン玉サイズの小さな馬鈴薯。

江藤、ぽかんと見つめる。

INT. 駅のホーム（深夜）

終電近くのプラットフォーム。

構内放送と遠くの列車の走行音だけが響き、乗客はまばら。

江藤と華、改札側からふらふら歩いてきて、立ち止まる。

二人とも少し赤ら顔で酔っている。

華（突然、叫ぶ）

脚本家になりてー！

江藤（驚いて）

え？

華

脚本家に！ なりてーーーー！

江藤（慌てて）

ちょ、うるさい。前田さん、うるさいから！

江藤、周囲を気にして華を制止しようとする。

華

叫べよ、江藤君も。わあああ！

江藤

だからうるさいって…

華、落ち着きを取り戻し、視線を遠くに向ける。

華

脚本家になったら、江藤君、福原遥とつき合えるかもよ

江藤

え？

江藤、思わずにやける。

華

鼻の下、伸びてる

江藤

…いや、自分はそういうんじゃないくて、面白い脚本が書ければいいから

華

それじゃ、私が芸能人と繋がりたいくて脚本家目指してるみたいじゃん

江藤

いや…

華（冷たく）

江藤くん、私のことそんなふうに思ってたんだ

江藤

…ごめん

華、神妙な顔をする江藤を見て、

華

まじめか！

江藤

え

華、笑う。

江藤もつられて笑う。

ホームに電車が近づく音が遠くから聞こえる。

華（突然）

うちら、同盟組もっか？

江藤

え？

華

学生の頃、学校の教科書で『いちご同盟』を読んで。私、あれ好きで

江藤

…

華（目をそらして）

やっぱこのギョーカイ、生き残るには繋がりが大事っていうか

江藤

…

華、江藤を真っ直ぐに見て。

華

せめてうちらだけでも、繋がっとく？

江藤（ドギマギして）

え…

華（引いて）

うわ

江藤（焦って）

いやいやいや

華、手を差し出す。

華

私が売れたら江藤君の面倒みてあげる。江藤君が売れたら私の面倒をみる。ど

う？

江藤

…

華

スランプで書けなくなっても、プロデューサーから嫌われても、仕事がなくな

らないよう、二人で助け合う。それが同盟だから

江藤、少し考えて、手を差し出す。

二人、ぎゅっと握手を交わす。

握手を解いた瞬間、華が江藤の背中を思い切り叩く。

江藤（驚いて）

痛っ、え？

華

おい江藤！ せっかくのチャンスなんだから、小早川先生にちゃんと気に入られてこいよ！

江藤

…

INT. テレビ局・会議室（数日後）-日中

江藤、緊張した面持ちでテーブルに座っている。

足元では靴先を落ち着きなく動かし、手汗で書類が少し湿っている。

ドアが開き、石毛と小早川が入ってくる。

江藤、慌てて立ち上がる。

石毛と小早川は対面の席に腰を下ろす。

石毛

君も座って

江藤、小さく会釈しながら腰を下ろす。

石毛、テーブルの上に置いたポテトチップの袋を江藤に差し出す。

石毛

第一稿、小早川くんが書き上げてくれたから、忌憚のない意見を聞かせてほし

い

江藤（声を絞り出す）

…あ、はい

江藤、震える手でポテトチップの袋を開ける。

出てきたポテチは、乱雑な形で、黒く焦げ、ホットチリの赤いスパイスがべっ

とりと絡んでいる。

江藤、一瞬戸惑いの表情を浮かべるが、口に運ぶ。

石毛（少し身を乗り出して）

どう？

江藤、噛みしめながら何か言おうとするが、言葉にならない。

口を開きかけては閉じ、結局うつむいて押し黙る。

空気が重たく、時間が止まったような沈黙。

小早川、無表情で江藤を一瞥する。

その視線は冷たく鋭い。

INT. アパート-江藤の部屋-台所-夜

薄暗い台所。

換気扇の低い音がかすかに響く。

江藤、流しの前に立ち、ザルに盛られた大小さまざまな馬鈴薯を一つずつ無言で洗っている。

水道の水がじゃぶじゃぶと落ちる音だけが静かに部屋を満たす。

ふと手を止め、握りしめた馬鈴薯を見つめる江藤。

目の奥に、堪えきれない怒りが湧き上がる。

次の瞬間、江藤は馬鈴薯を壁に向かって思い切り投げつける。

壁に当たって鈍い音を立てて転がる馬鈴薯。

江藤（叫ぶように）

なんで恋愛要素つけくわえてんだよ！

静まり返る部屋。

息を荒くする江藤だけが立ち尽くしている。

INT. 料理教室・室内（数日後）-日中

十数人の生徒たちが調理台を囲み、全員エプロン姿で立っている。

SUPER：脚本教室

キッチン前には、講師、江藤、華、石毛の四人。

講師（愛想よく）

今日はコンクール対策ということで、CCB テレビ局のプロデューサーの方と、

CCB シナリオ大賞の受賞者お二人に来ていただきました。お三方、本日はよろ

しくお願いします

江藤と華、小さく頭を下げる。

石毛は胸を張り、軽く会釈。

講師

前田さんはこの教室でチューターを務めてもらっているので、みなさんご存じ
ですね

生徒たちの視線が江藤と前田に集まり、わずかに緊張が走る。

講師（振り返って）

それでは、石毛さんから一言お願いします

石毛、にっこり笑い、ポケットから馬鈴薯を一つ取り出し、高く掲げる。

石毛

私はこれまで数々のテレビドラマを手がけてきました。これが、その象徴とも
いえる「企画書」です

生徒たち、興味津々に見つめる。

石毛

今日は、いい企画の作り方を始め、みなさんがコンクールで勝ち残るための秘訣をお話できればと思います

× × ×

一人の生徒が挙手する。

生徒 1

あの…コンクールでは、こういう脚本は NG、みたいなのってありますか？

石毛（自信満々に）

型にはまったストーリーはいりません。この教室で皆さんが習うような起承転結ももちろん大事ですが——ストーリーよりもキャラクターです。どんなにストーリーがよくても、生きた人間が描かれていなければ、作品に魅力を感じません

生徒たち、熱心にメモを取る。

生徒 2

どんな勉強方法をすればいいですか？

石毛

人間観察ですね。同窓会に顔を出してみるのもいいかもしれません。

何か必ず発見があるはずです。あとは、普段からメモを取ること

やや説教めいた口調。

× × ×

江藤、調理台の前で包丁を手取る。

江藤（控えめに）

映画を分析することだと思います。名作を観ていくうちに、ストーリー構造が

どうなっているのか段々見えてくるので…

江藤、馬鈴薯に包丁を当てる。

江藤

あとは…切り口というか、同じ題材でも見せ方を変えることで、ストーリーの面白さは大きく変わると思います

包丁で斜めに切って見せる。

× × ×

華、まな板の前。馬鈴薯を手取る。

華

私がコンクールに挑戦していたときは、とにかく、自分の身の回りのことを書くことを意識していました。知らないことは絶対に書けないので。身近なところからしか、人を惹きつける物語は生まれないと思います

講師

ほかに質問のある方は――

生徒が手を上げる。講師、指さす。

生徒3

プロの脚本家に一番必要なものは何だと思いますか？

石毛

実力があるのは大前提で、そのうえで、求められるものを書けるかどうか。つまり、打ち合わせでしっかりコミュニケーションが取れて、直しに対応できるか。そういった点も重要です

講師

前田さんは？

華

私はまだプロとはいえませんが、石毛さんと同じ意見です。実力は大前提で、それ以外のことができるかどうかだと思います

講師

江藤さんは？

江藤、沈黙。

俯き、黙り込んでしまう。

講師

…？

江藤（口ごもりながら）

…すみません…わかりません

華、俯く江藤を見る。

INT. 居酒屋 - 夜

ざわついた店内。

テーブルを囲み、講師、江藤、華、そして数人の生徒たちが飲んでいる。

講師、ジョッキを手に、江藤と華へ、

講師（上機嫌に）

お二人さん、今日はおおきに。わしの奢りやから、さ、どんどん飲んで

講師、ビールを注ぐ。

講師（江藤へ）

実はわし、コテコテの関西人や。気づかへんかったやろ？

江藤、軽く笑う。

生徒 1

先生は何だと思います？ プロに一番必要なもの

講師（真顔で）

そりゃ、筆力に決まっとるやないか

生徒 2

先生。プロの一発ギャグお願いします

講師

大阪名物パチパチパンチ…って、こら（とノリツッコミ）

一同、笑う。

生徒 1

でも、プロになるためには、筆力のほかにコネづくりも大切だと聞きました

講師

コネとか、営業とか、わしからいわせれば、そんなんは邪なやり方や。筆力があれば、必ずプロになれる。筆力をつけることが何よりの近道や

生徒 3 (やや酔った勢いで)

先生の代表作って何ですか？ 調べても出てこないんですが…

途端に、テーブルの空気が張りつめる。

沈黙。

江藤と華、どぎまぎする。

講師

…そうか。ごめんな、わざわざ調べさせてもうて。でもな、今ちょうど、渾身のドラマ企画を立ててるところやで…

講師、ポケットを漁る。

講師

よう見とけ。おんどりゃ。これがプロの書く企画書や

講師、ポケットから馬鈴薯を一つ取り出し、テーブルに放る。

ビー玉サイズの馬鈴薯が、ころころと転がる。

EXT. テレビ局・屋外 - 日中（一ヶ月後）

真夏の太陽が燦々と降り注いでいる。

SUPER :

一ヶ月後

江藤、粉碎機に馬鈴薯を入れ、粉々にしている。

回転する粉碎機の映像と重なって以下のスーパー。

SUPER :

シュレッダー

足元には段ボール箱が山積みになっている。

「ボツ」と書かれた箱の中には、大量の馬鈴薯。

石毛、やってくる。

石毛

ありがとう。助かるよ

江藤

あ、いえ

石毛、去っていく。

江藤、額の汗を拭い、小さくため息を吐く。

INT. テレビ局・廊下 - 日中

江藤、歩いている。

正面から石毛がやってくる。

その手には、串刺しのハリケーンポテト。

江藤、思わず二度見する。

石毛

江藤くん。さっきはありがとう

江藤、ハリケーンポテトを凝視している。

石毛

あ、これ？

石毛、江藤にハリケーンポテトを見せる。

——生のまま、ハリケーン状にスライスされた馬鈴薯。

江藤

…それって

石毛

前田くんの企画

江藤

え

石毛

これ、なんか面白そうだよ。きちんとプロットまで仕上がってるし。ドラマ化を狙えるんじゃないかって。直感でさ、ピーンときたんだ

江藤

…

INT. テレビ局・食堂 - 日中

華、食事をしている。

INT. テレビ局・会議室（回想）

華、コンクール作品の下読みをしている。

華、応募脚本の“ハリケーンポテト”をじっと眺める。

華、ペンを取り、評価シートに、×印をつける。

INT. テレビ局・食堂 - 日中（回想から戻る）

華、何か考え込む。

江藤、やってくる。

華、気づいて、

華

あ。江藤くん

江藤、華に軽く頭を下げる。

INT. テレビ局・廊下 - 日中

江藤と華、向かい合って立っている。

江藤、何か言いたげだが、言葉が出ない。

二人、どことなく気まずい。

華、ふと壁に目を向け、

華

ドラマ、今日だね

壁に貼られた以下のポスター。

——スペシャルドラマ『黄金色の思い出』。

ギャンブルに溺れ、すべてを失った男と、依存症患者たちを支える女の、愛と

再生の物語。

今夜9時放送。

華

おめでとう…で、いいんだよね？

江藤、困った表情。

沈黙。

江藤

…あ、そういえば、さっき石毛さんと会って

華

あー。もしかして、あれ、見た？

江藤

うん…

華

なんか試しに書いたら気に入られちゃったっていう

華、おどけるように笑う。

江藤（遠慮がちに）

あれって…大丈夫…なの？

華

え。うーん。もしかしたら影響受けてるかもだけど。でも、内容は間違いなく

私のオリジナルだし。だから、問題ないかなって

江藤

…

華、スマホで時計を確認し、

華

あ。じゃ、私、バイトの時間だから

華、そそくさと去る。

江藤、その後ろ姿を不安げに見つめる。

INT. 江藤の部屋 - 夜

薄暗い室内。

テーブルの上には、空のカップ麺や菓子袋が散乱している。

テレビ画面には、江藤が企画したドラマ『黄金色の思い出』のラストシーン。

INT. テレビ画面（劇中ドラマ）

施設の中庭。

ギャンブル依存症の父親（50代）、うつむき、声を震わせる。

父親

…自分を必要とする人間など、一人もいないと思ってた…

女性スタッフ（30代）、そっと父親の手を握る。

女性スタッフ

いますよ…ちゃんここに

父親、涙ぐみながら顔を上げる。

カメラ、ゆっくりと引く。

中庭の灯りの中、二人の姿が小さくなっていく。

――エンドロール。

「プロデューサー 石毛雅彦」

「脚本 小早川桐子」

INT. 江藤の部屋 - 夜

江藤、無言で画面を見つめ続ける。

INT. ファミレス・休憩室（翌日） - 夜

江藤と正田、制服姿のまま、小さなテーブルに並んで座っている。

正田

…そうか。クレジットすらなしか

正田、スマホをいじる。

画面にはオーディション結果。

「不合格」の文字が浮かぶ。

その横で、江藤のため息。

正田

そりゃ、ため息もつきたくなるよな

江藤、弱々しく笑う。

店内のざわめきが、ドア越しにかすかに聞こえる。

江藤

…なんか続けていく自信、なくなってきた

正田

…

江藤

全然ちがうっていうか。思ってた世界と

正田（スマホをいじりながら）

どんな世界だと思ってたんだよ？

江藤、黙り込む。

正田、顔をあげて江藤を見る。

正田

ん？

江藤

…自分が思ってたのは、プロ野球みたいな世界とか

正田

…

江藤

あと、囲碁とか、将棋とか

正田、「不合格」の画面を閉じ、苦笑い。

正田（笑って）

いうねえ。自分は実力者だったか？

江藤（笑う）

いや、そうは思っていないけど

正田

ほんとか？

江藤、ふと真剣な表情に変わる。

江藤

でも…昨日の放送を見て、自分ならもっと面白い脚本が書けたとは思った

正田、半分呆れつつ、どこか嬉しそうに笑う。

正田

江藤ってさ、なよなよしてんのに…そういうとこ、一途だよな

江藤、意外そうに正田を見る。

正田、立ち上がる。

正田

でも、それは会社でもどこでも同じなんじゃねえの。要領よく立ち回るやつが

出世するってのは

INT. テレビ局・会議室（数日後） - 日中

江藤、華、石毛がテーブルを囲んで座っている。

石毛

今回は、前田くんの企画をホンにすることに決めました。枠は次クールの連続ドラマ。時間もあまりないし、明日からさっそくホン作りに取りかかろうと思う

華、喜びを嘸み殺すように、真剣な表情をする。

石毛

それで、脚本なんだけどさ、江藤くんのとくと同じく、ベテランの小早川くんにお願いしようと思うんだ

石毛、華に目を向ける。

石毛

前田くん、どうだろう？

華（ためらいなく）

ぜひ！ 私、小早川先生を書くドラマ好きで。私からもお願いしたいです！

石毛

よかった

石毛、江藤に視線を映して。

石毛

今回は江藤くんにも後方支援として脚本作りを手伝ってもらいたい。ドラマの舞台になっているワイナリーのシナハンを、みんなでやってもらいたんだ

江藤と華、うなづく。

石毛

アポは僕が取っておくから、日本ワインやワイナリーについて、実際に足を運んで、ホンのための資料を集めにいこう

江藤・華

はい

石毛、二人を見回す。

石毛

今、ロゼとか来てるでしょ？ 僕もワインのドラマ、前からやりたかったんだ。このドラマ、みんなで必ず成功させよう

石毛、立ち上がる。

華、感情がこみ上げ、思わず息を吐く。

INT. テレビ局・食堂 - 日中

江藤と華、並んで食事をしている。

華（上機嫌で）

やっと一歩進んだって感じがする

江藤、無言。

華

江藤くん、サポートよろしくね

江藤

…うん

華、箸を進める。

江藤、箸を止める。

江藤

…でも…大丈夫…かな？

華、ぴくりと反応。

江藤（もごもごと）

なんか、まずいっていうか…

華、箸を置き、じっと江藤を見据える。

江藤、思わずたじろぐ。

華（はっきりとした口調で）

江藤的にはパクリってこと？ 私の企画

江藤

いや、なんか…題材とか舞台とか、見た目は変わってるけど…中身は同じに見

えたというか

華

そう？ ループものなんて、別に珍しくないし

江藤

でも、普通のループ構造とは明らかに違うっていうか…

華

普通のループ構造に回想を混ぜただけで、よくある脚本だと私は思うけど

江藤

でも、あれはループ構造と扇状回想法を組み合わせたところにオリジナルと呼

べる――

華（いらっとして）

そんなの、わかんないじゃん！

江藤、驚いて、言葉を止める。

華

たまたまってことだってあるかもしれない

江藤

…

華

それに江藤君みたいにさ、その道をかじった人じゃないと、フツの人は構成
のことなんか、わかんないんだよ。うまくやれば、真似したかどうかなんか見
分けがつかない

江藤、黙る。

華

江藤くん、いったよね。プロットライターは三幕構成でいうボトムポイント
だって

江藤

…

華

私より筆力があって、大きなコンクールで賞を取っても、プロになれずに消えていった人たちなんか何人も知ってる

江藤、視線を落とす。

華

江藤くんってさ、なんかプロを見下してる感じがすごくして。自分は映画に詳しいからって、テレビドラマしか見ない人を下に思ってる？ そうやって周りの人たちを下に見ることで、自分うまく書ける人だと思いたいんだろうけどさ、いっとくけど、江藤くんくらいの人ならほかにいくらでもいるよ？

江藤

…

華

…ほんとにいいの？ 江藤くんは。このままで

江藤、答えられない。

華

私はいやだ

江藤

…

華

色んなものを犠牲にして、人生かけて追いかけてきたのに、企画書かいて終わりだなんて…そんなの絶対にいやだから

華、立ち上がる。

そのまま、振り返らずに去っていく。

江藤、一人取り残される。

EXT. テレビ局前 -翌日-朝

テレビ局の搬入口前。

小型のワゴン車が停まっている。

車体には制作会社のロゴ。

江藤と華、少し距離を空けて立っている。

互いに無言で、気まずさが漂っている。

そこへ石毛が、缶コーヒー片手に現れる。

石毛

おはよう

江藤と華、軽く会釈。

石毛

小早川くんも来たがってたんだけどさ。別件の打ち合わせが入っちゃってね。

今日は僕と君たち二人で見学しよう

INT. ロケ車 - 走行中・朝

石毛が運転席。

助手席に華。

後部座席に江藤。

フロントガラスの先に高井戸インターチェンジの標識。

石毛

談合坂で詰まってなきやいいけど

EXT. 中央自動車道 - 朝

ワゴン車が高速道路を走る。

左右を流れる防音壁。

やがて視界が開け、山並みが遠くに見え始める。

EXT. 中央自動車道・勝沼付近 - 昼

道路脇の大きな案内標識。

「勝沼」

その先に、なだらかな丘陵地帯。

葡萄棚が斜面に広がっている。

EXT. 朝霧ヴィンヤード - 昼

白壁と木材を基調にした醸造所。

整然と並ぶ葡萄畑。

朝の名残のような薄い霧が、まだ斜面に漂っている。

ワゴン車がゆっくり停車する。

江藤、車を降りて景色を見上げる。

華も降り立ち、思わず息をのむ。

華

…きれい

石毛

到着。山梨県勝沼。朝霧ヴィンヤード

三人、ゆっくり歩き出す。

佐々岡（51）、笑顔で入口に立っている。

隣には野村（38）の姿もある。

佐々岡

はじめまして。生産者の佐々岡といいます

石毛

今日はよろしくお願ひします

江藤、華、頭をさげる。

佐々岡、野村を示して、

佐々岡

こちら、うちのワインの買い付けをしてくれているディストリビューターの野村さん

野村（愛想よく）

どうも

佐々岡

彼はソムリエの資格も持ってる人だから、助っ人できてもらいました。ワインの質問には完璧に答えてくれますよ

野村（苦笑し）

やだな、佐々岡さん、ハードルあげないでくださいよ

江藤、華

よろしく申し上げます

EXT. 朝霧ヴィンヤード・葡萄畑 - 昼

一同、畑を歩いている。

陽光を浴びた葡萄の房。

粒はまだ青さを残しながらも、ところどころ淡く染まっている。

ベレゾン——葡萄が成熟へ向かい、色づき始める時期。

風が一瞬、葉を揺らす。

佐々岡

うちは甲州が主力です。最近はマスカット・ベリーAにも力を入れてるけど

佐々岡、しゃがみ込み、房を軽く持ち上げる。

佐々岡

どうぞ。触ってみて

華、しゃがみ、そっと指先で葡萄に触れる

華

…思ったより、硬い

野村、少し離れた場所か畑を見渡しながら、

野村

日本は雨が多いでしょう。だから甲州は、自分を守るために皮が厚くなるんです

華、感心する。

佐々岡

葡萄って、不思議でね。水や栄養を与えすぎると、実は立派になるけど味がぼやける。少し足りないくらいで育った実のほうが、最後に芯が残るんだ

江藤、その言葉に耳を傾けている。

華、葡萄に触れたまま、

華

収穫は、いつ頃なんですか？

佐々岡

十月。まだ暗いうちから始めます。夜が明けると、香りが逃げやすいから

INT. 朝霧ヴィンヤード・瓶詰めライン - 昼

透明なボトルがラインを流れていく。

中には淡い黄金色の液体。

機械音が一定のリズムを刻む。

次々と打ち込まれるコルク。

作業員たちが無駄のない動きで作業している。

華

もっと手作業なのかと思ってました

佐々岡

ここはかなり機械化してるよ。去年仕込んだ甲州の瓶詰め作業。夏の間は、こ

の作業が中心だね

江藤、流れていく無数のボトルを目で追う。

INT. デゴルジュマン作業場 - 昼

白い作業室。

瓶が逆さにセットされている。

作業員が瓶口を冷却液へ浸す。

数秒後、引き上げる。

器具を外す。

パンッ！

氷の塊が勢いよく飛ぶ。

華（小さく叫ぶ）

きゃっ

思わず隣の石毛の腕を掴む。

すぐに手を離す。

華

ご、ごめんなさい。

石毛

…いや。なんか派手だねえ。これ、何をやってるんです？

佐々岡

デゴルジュマンといって、瓶口に集めた澱を凍らせて取り除く作業です

INT. 朝霧ヴィンヤード・熟成庫 - 昼

薄暗い石造りの空間。

ひんやりとした空気。

木製ラックに、無数の瓶が逆さに差し込まれている。

佐々岡

こちらは澱を取り除く工程。ルミアージュといって、うちのスパークリングは、瓶内二次発酵——つまり、シャンパンと同じ製法で作ってます

華、不思議そうに瓶を見つめる。

華

シャンパンとは違うんですか？

野村

“シャンパン”と呼べるのは、フランスのシャンパーニュ地方で作られたスパークリングワインだけなんです

華

へえ…知らなかった

佐々岡、一本の瓶に手を伸ばす。

指先でわずかに回す。

キュッ——

乾いたガラス音。

佐々岡

瓶の中の澱を、少しずつ口元に集めていくんだ。一本ずつ、毎日

江藤、無数の瓶を見つめる。

佐々岡（江藤へ）

やってみるかい？

江藤、遠慮がちに瓶に触れる。

江藤、ゆっくりと回す。

佐々岡

この作業は時間がかかるから、スパークリングは年に三百本ほどしか作れない

石毛

三百か…それだとすぐ売り切れそうですね

佐々岡

うん。だからこのスパークリングは特別で、野村さんのように、僕の作るワインを理解して、きちんと評価してくれる方にしか出さないんです

野村（少し照れて）

そうっていただけると嬉しいですね

INT. 朝霧ヴィンヤード・屋外テラス - 昼

一同、和やかな空気でワインを試飲している。

遠くにぶどう畑が広がる。

華、白ワイン（甲州）を一口飲む。

華

…おいしい

野村

甲州は香りは控えめなんですけど、後からじわっと旨味が出てくるんです

華

へえー

江藤も飲む。

江藤、小さく頷く。

野村

日本の気候で育つぶん、酸がきれいに残るんです。派手じゃないけど、静かに

続く味ですね

と石毛、持参した一本のワインを取り出す。

ワインのラベルは紙で覆われている。

一同、不思議そうに見る。

石毛

実はですね、野村さんにひとつお願いがありまして

野村

…？

石毛

テレビマンの性というか。これ、私の愛飲するワインなんですが、銘柄を当ててもらえませんか？

野村、少し笑う。

野村

ブラインドですか

石毛

お願いできますか

野村

そうですね。佐々岡さんも一緒にやりませんか？

佐々岡

え、僕も？

野村

ええ。ぜひ

佐々岡

困ったなあ

野村と佐々岡の前に、二つのグラスが並ぶ。

ルビー色のワインが注がれる。

江藤、華、石毛が見守る。

石毛

こりゃ面白くなってきたね

野村と佐々岡、グラスを持ち上げる。

二人、静かに色を見る。

野村

淡いルビーですね

佐々岡

うん。エッジにガーネット

二人、香りを取る。

野村

赤い果実

佐々岡

ラズベリー、ドライチェリー

野村

スマレ

佐々岡

湿った土

野村

樽は強くない。新樽ではないですね

二人、一口含む。

静かに転がす。

野村

酸は高め。辛口

佐々岡

タンニンは中程度

野村

冷涼な産地

佐々岡

オールドワールド

野村

ピノ・ノワール

佐々岡

フランス

野村

ブルゴーニュ

佐々岡、もう一口。

佐々岡、わずかに首を振る。

佐々岡

ポマール…いや、ヴォルネイ

野村（きっぱりと）

サントネイ

佐々岡、ちらっと野村を見る。

野村、ポーカーフェイス。

佐々岡（自分を信じるように、答える）

ヴォルネイ。ミシェル・ラファルジュ

野村

ルイ・ジャド。サントネイ・クロ・ド・マルト

沈黙。

佐々岡（にやりと）

割れたね

野村（笑顔で）

そのようですね

石毛、ワインを手にし、覆っていた紙を外す。

石毛

…正解は、ルイ・ジャド。サントネイ・クロ・ド・マルト。野村さん。大当たり

華、思わず拍手する。

江藤、息をのむ。

目を見開いたまま、野村と佐々岡を見つめる。

華

すごい…プロだ

佐々岡（笑って）

野村さん、ズルしてない？

野村、笑う。

石毛

一口で、そこまでわかるものなんですか

野村

“わかる”というより、残るんです。ワインの輪郭が

石毛、うなづく。

石毛

通じるものを感じます。脚本も同じで、いいホンかどうかは、最初の1枚を読

めばわかるので

野村

なるほど。では、みなさんもソムリエですね

一同、笑う。

江藤だけ、余韻から抜け出せず、少し遅れて笑う。

INT. ロケ車 - 帰路・夕方

夕暮れ。

車窓の外に、オレンジ色の光が流れていく。

石毛が運転している。

江藤と華、持ち帰った肥料袋を抱えている。

肥料袋に重なって以下の SUPER。

SUPER:

資料

石毛

テイスティングバトル、すごかったね

華

はい...感動しました

石毛

あれ、ドラマのワンシーンで使えるんじゃないかな

華

私も思いました！ 見ててすごいドラマチックで

石毛

うん。そうだね。でも、まさか当てられるとは思わなかったよ

華

ほんとですよ

石毛、華、楽しげに話す。

江藤、会話に入れず、ひとり窓を見つめる。

INT. 江藤の部屋 - 夜

静かな部屋。

机の上に、持ち帰った肥料袋。

江藤、その中身を手のひらに少しだけ落とす。

さらさらとした感触。

江藤、じっと見つめる。

江藤（ぽつり）

カベルネ・ソーヴィニオンは骨格があり…ピノ・ノワールは繊細さを持つ品種

…

間。

江藤

ハリウッドと、カンヌみたいな

佐々岡の言葉が重なる。

佐々岡 V.O

少し足りないくらいで育った実のほうが、芯が残る

江藤、手の中の粒を見る。

江藤

ストーリーも、足りないほうが、行間が生まれる…

間。

江藤

ワインって、ストーリー作りに似てるのかもしれない

INT. テレビ局・会議室 - 翌日

華と石毛、入ってくる。

室内のテーブルにハリケーンポテトがいくつも置かれている。

石毛

スケジュールも詰まってるし、今日のシナハンは江藤くんに任せて、並行して

会議を進めていこう

華

…はい

華、わずかに緊張している。

EXT. 高速バス停 - 昼

高速バスが停車する。

江藤、降りてくる。

江藤、リュックを背負い、周囲を見回す。

EXT. 東御の道 - 昼

江藤、汗をぬぐいながら坂道を歩く。

ひんやりした高原の空気。

やがて——「灰白ワイナリー」の建物が姿を現す。

緩やかな斜面に沿うように建つ、灰色のコンクリートと白木の低層建築。

壁面に小さく「灰白 WINERY」の文字が刻まれている。

EXT. 灰白ワイナリー前 - 昼

オーナーの西山（58）が出迎える。

西山

西山です。遠いところ、どうも

江藤、頭をさげ、

江藤

江藤です。本日はよろしく申し上げます

EXT. 葡萄畑 - 昼

江藤と西山、畑を歩く。

背後には浅間の山並み。

江藤、しゃがみ込み、土を指先ですくう。

INT. テレビ局・会議室 - 同時刻

室内に華、石毛、小早川、局員たち。

華、ハリケーンポテトを手にし、説明している。

華

このドラマは日本のワイナリーが舞台であり、何者かに襲われたことをきっかけに、オーナーの主人公がタイムループに陥ってしまうミステリーです

一同、ハリケーンポテトを手に聞いている。

華

主人公は過去にも同じ現象を経験しており、タイムループに巻き込まれた現在軸と、かつてタイムループしていた過去軸。二つの時間軸を交互に描きながら、事件の真相が徐々に明らかになっていく構成です

小早川、無表情で聞いている。

沈黙。

小早川（ぼそりと）

…ストーリーは悪くないけど

小早川、手持ち無沙汰にハリケーンポテトの串を回している。

小早川

オーナーとヒロインの関係は？

華

はい。昔からの知人という設定です

小早川、カバンからアルミの小袋を取り出す。

華

…？

小早川、小袋を開ける。

小袋の中身はホットチリパウダー。

小早川

もっと恋愛要素入れたほうがいいんじゃないの？

小早川、ホットチリパウダーをハリケーンポテトにかけ始める。

華、赤く染まったハリケーンポテトを見て、押し黙る。

EXT. 灰白ワイナリー・休憩スペース - 昼

簡素な木製ベンチ。

高原の風。遠くで作業音。

江藤、腰かけている。

西山がやってきて、ペットボトルの水を一本差し出す。

西山

暑いでしょう。よかったら

江藤

あ、ありがとうございます

江藤、丁寧に受け取る。

西山、自分も腰かける。

西山

どう？ 何か役に立ちそう？

江藤

あ、はい…勉強になります

西山、しばらく畑を眺める。

風に揺れる葡萄の葉が、陽を反射している。

西山

知ってる？ ワイン畑って、自然にできてるようで、かなり作り手の設計が入

ってるんだ

江藤、西山に顔を向ける。

西山

どの列にどの品種を植えるか。どこを弱らせて、どこを伸ばすか。日照も、水も、収量も、全部コントロールしてる

江藤、静かに聞き入る。

西山

例えばさ、実をたくさんつけさせれば、量は簡単に取れるんだ。だけど、そのぶん一粒一粒の集中力は落ちてしまう。逆に房を落として、数を絞れば味は締まるけど、締めすぎれば窮屈になる

西山

風と香りの関係も同じ。風を通せば香りは立つけど、やりすぎると痩せる。だから、どこを残して、どこを切るか、人間が設計して育ててるんだ

江藤、少し考え、言葉を一つ一つ探るように、

江藤

…なんか、脚本作りに似ているというか

西山

ん？

江藤

脚本も…ストーリーの設計をするので。ストーリーのどこを残すとか、どこを削るかとか。そういうのを、プロットって言って。自分は…その作業が、いちばん大事だと思っていて…だから、似ていると思いました

西山、小さく微笑む。

西山

なるほど。君のいうとおりかもしれない

西山、ペットボトルの水を一口飲む。

西山

私は映画鑑賞が好きなんだけど、ワインってね、映画みたいなところがある

江藤

…え

西山

ワインを一本飲み終えたあとして、味がどういうふうに残っているかが残るんだ。その流れを私たちは、入口、膨らみ、抜け、って呼ぶんだけど

西山、指折り数える仕草をする。

西山

まず入口は、最初のひと口目。ここは主に収穫のタイミングで決まる。少し早めに摘めば、酸が立つから輪郭が締まってシャープに入る。逆に熟してから摘めば、柔らかく、丸く入る。どっちがいいかじゃない。どう始めたいか、それを決める

江藤、知らぬまに聞き入っている。

西山

次が膨らみ。口の中でどう展開するか。ここは発酵と抽出。温度をどうするか。皮をどれだけ漬けるか。澱とどれだけ寝かせるか。その積み重ねで、途中の厚みや変化が決まる

西山

いい膨らみってというのは、一口の中で、ちゃんと景色が変わるんだ。最初は静かだったのに、途中から果実が立ったり、あとから酸が追いかけてきたり。そういう展開があると、人は次を知りたくなる。逆に最初から最後まで平坦な景色はよくない。どれだけ濃くても途中で飽きてしまう

西山

そして最後が抜け。飲み込んだあと、何が残るか。ここは樽とブレンドが大きい。余韻を長くしたければ、後ろに残る品種を足す。香りを立たせたければ、樽の使い方を変える。最後に何を残すか、そこを設計する

間。

西山

入口だけ派手でもダメ。膨らみだけ豊かでもダメ。抜けだけ長くてもダメ。入口で掴んで、膨らみで持たせて、抜けで残す。その一本の流れを、私たち作り手はうまく計算しなくちゃいけないんだ

西山、言葉に終える。

江藤、表情にかすかな熱を帯びている。

江藤（高ぶって）

…すごいです

間。

江藤

…映画、そのものだと思います

西山、少し笑う。

西山

うん。時間芸術だと思う。ワイン作りもね

江藤、畑を見る。

西山の言葉が、胸の奥に落ちていく。

江藤、言葉が出ない。

ただ、風に揺らめく葡萄の葉を見つめる。

INT. テレビ局 -同刻-

会議が終わる。

局員たちが次々と部屋を出ていく。

INT. テレビ局・廊下

小早川、歩いている。

華 (V.O)

小早川先生！

小早川、立ち止まり、振り返る。

華、立っている。

その手にチリパウダーまみれのハリケーンポテト。

華（ハリケーンポテトを見せ）

最高でした！ 先生のアイデア

小早川

…

華

恋愛要素が入ったことで、ストーリーがぐっと引き締まって…本気で、プロの

技術を感じました

小早川

…そう

華

私、先生の書くドラマが大好きで。もっといろいろ教えてください

小早川（満更でもない）

まあ、いいけど

華、顔を輝かせ、深く頭を下げる。

以下、カットバック

EXT. 朝霧ヴィンヤード - 昼

江藤、華、小早川、石毛の姿。

小早川、華、石毛は楽しげにワインを試飲している。

傍らで、江藤は肥料袋を手に、汗を流しながら肥料を集めている。

INT. 江藤の部屋 - 夜

江藤、座っている。

ワインを片手に映画を観ている。

ノートパソコンの画面には、ワイン映画『サイドウェイ』。

車が木に激突するシーンが流れている。

江藤、食い入るように見つめる。

INT. 華の部屋 - 夜

華、台所に立っている。

まな板の上には、生のハリケーンポテト。

華、包丁を使ってハリケーンポテトの形を整えている。

INT. テレビ局・フロアデスク - 日

江藤、石毛に肥料袋を差し出す。

江藤

シナハンのまとめです

石毛

ありがとう

INT. テレビ局・フードコーディネーター室 - 日

エプロン姿の華と小早川。

二人、ハリケーンポテトを作っている。

華、馬鈴薯を螺旋状に切りながら話す。

華

まず、現在軸で主人公が何者かに襲われたあと、一回目の回想に入ります。一

回目の回想はミスリードで、なぜ主人公は襲われたのかを見せていると思わせ

て、回想のラストでまた襲われる。そして現在軸に戻って、そこで初めて、過去にもタイムループに陥ったことがあると種明かしをして…

華の手が止まる。

ハリケーンポテトの螺旋の一部が、うまく繋がらない。

華

…でも、そのあとの…ここがうまく繋がらない

小早川、華の苦戦する様子を見て、

小早川

そこも回想にすれば？

華

え？

小早川

回想の回想

華

…

華、試しに包丁で切り込む。

華

…あ

華、ハリケーンポテトを見る。

螺旋が綺麗に繋がっている。

華

繋がった…繋がりました！

INT. テレビ局・デスク - 日

石毛、ポテチの袋を抱え、ポテチを食べている。

一枚食べては袋ごとゴミ箱に捨てる。

一枚食べては捨てる。

EXT. 神奈川のワイナリー - 昼

江藤、生産者の話を必死にメモしている。

江藤、真剣な眼差し。

INT. 会議室 - 夜

小早川と局員たちの姿。

一同、ポテチを食べながら談笑している。

INT. フードコーディネーター室- 夜

エプロン姿の華、生のハリケーンポテトを揚げている。

そこへ小早川がやってくる。

華、揚げたてのハリケーンポテトを小早川に差し出す。

小早川、一口食べる。

小早川、静かにうなづく。

華、喜ぶ。

EXT. 朝霧ヴィンヤード - 夕

石毛、江藤、華の姿。

佐々岡、ワインを石毛にプレゼントする。

石毛、受け取る。

江藤ら、深く頭を下げる。

INT. 江藤の部屋 - 夜

使い終えた肥料袋。

江藤、それらをひとつひとつ丁寧に畳んでいる。

INT. 会議室 - 夜

机の上に完成したハリケーンポテト。

華、ハリケーンポテトをポテチの袋に詰める。

華、袋の封を閉じる。

小早川、静かに拍手する。

それにつられ、局員たちも拍手する。

華、顔をほころばせる。

カットバック、おわり

INT. 居酒屋・店内 - 数日後 - 夜

江藤と正田、入ってくる。

店員がやってくる。

店員

何名様ですか？

× × ×

テーブル席。

江藤と正田、向かい合って座っている。

正田

久しぶりだな。二人で飲むの

江藤

…確かに

正田

どうなんだ？ 脚本家のほうは

江藤

…まあ、相変わらずというか

江藤、弱々しく笑う。

店員が生ビールを運んでくる。

店員

生ビール、お待たせしました

ジョッキが二つ置かれる。

二人、それを手に取る。

正田、沈黙し、

正田

…俺さ、今日でバイト辞めてきた

江藤

え

正田

終わったよ

江藤

…

正田

俺の大冒険は

正田、笑う。

正田

この前のオーディションで最後って、親と約束してたから。明日からは、遅れ
ばせながら就活だ

江藤、言葉を失う。

正田

だから、亮平アプローチも終わりだ。今日はお前に付き合ってもらって、好き
なだけ食って帰る

正田、ビールをあおる。

江藤、ジョッキを手にしたまま、うつむいたまま。

江藤

…ごめん

間。

江藤

俺、自分のことでいっばいで…

正田

そんな顔すんなよ

正田、苦笑してビールを飲む。

江藤

あ、今日は…俺が奢るから

正田

無理すんなって

江藤

奢るから

正田

なんの奢りだよ。お祝いの席でもねえだろ

江藤

…

EXT. 駅前 - 夜

二人、並んで歩いている。

正田

じゃ、ここで

江藤

うん…

正田、背を向けて歩き出す。

正田、数歩進み、立ち止まる。

正田、振り返る。

江藤、まだ立っている。

正田

おい。江藤

江藤

…？

正田

お前は真面目なくせに、プライドが高くて、わがままなんだよ

江藤

…

正田

脚本家なんてのは、世間から見りゃギョーカイジンの手下だ

江藤

…

正田

ドラえもんでいやあ、プロデューサーがジャイアンで、脚本家はスネ夫。時代劇でいやあ、悪代官と越後屋だ。世間にとっちゃ、脚本家なんてそんなもんなんだよ

江藤

…

正田

だから、江藤。そう割り切っちゃえば、いいじゃねえか。プライドとか、こだわりとか、そんなもんは捨てて、現実を受け入れちゃえば。そうすれば、案外あっさり手に入るんじゃないのか？ 命削って求め続けてきたものが——俺とちがってさ（ふっと笑う）

INT. テレビ局・会議室 - 翌日 - 夜

会議室の隅。

ワインボトルと紙コップ。

簡素な打ち上げが行われている。

石毛、一同の前で紙コップを掲げる。

石毛

新作「リフレイングレープ」。いよいよ明日から撮影に入ります

一同、静まる。

石毛

ひとまず疲れさまでした。乾杯！

一斉に紙コップが掲げられる。

室内に和やかな笑い声。

華、小早川の隣で話している。

華

先生のおかげで、最高の脚本ができました

小早川

まあね。でも、最初から筋はよかった

華、嬉しそうに笑う。

石毛も加わる。

石毛

テイスティングバトルのシーン、かなり効いてるよ

三人、自然に会話が弾む。

少し離れた場所。

江藤、紙コップを手に立っている。

誰とも目が合わない。

江藤、口をつけようとして、やめる。

遠くから笑い声。

華たちの輪に視線を向ける。

その輪は、どこか完成された円のように、入り込む隙がない。

江藤、寂しげに笑い、紙コップを机に置く。

江藤、静かに会議室を出ていく。

誰も気づかない。

INT. 江藤の部屋 - 夜

江藤、帰ってくる。

くたびれたまま、ドアを閉める。

部屋に入り、ベランダの窓を開ける。

夜風が吹き付ける。

ベランダのプランター。

そこには生い茂った馬鈴薯の葉。

江藤、じっと見つめる。

INT. 台所 - 深夜

土のついた馬鈴薯がボウルに入っている。

江藤、蛇口をひねる。

水音。

江藤、タワシで馬鈴薯の表面を丁寧にこする。

土が少しずつ落ちていく。

洗い終えたものをザルに並べる。

江藤、布巾で一個ずつ水気を拭き取る。

×

×

×

江藤、馬鈴薯の皮を器用に薄く剥く。

手元は慎重。

刃先が規則正しく動く。

皮が長くつながって落ちる。

× × ×

江藤、皮をむいた馬鈴薯を横に寝かせる。

包丁を入れる。

すっ、と薄く削ぐ。

半透明の一枚。

まな板に落ちる。

もう一枚。

また一枚。

一定の厚み。

静かで、心地よいリズム。

トン、スッ。

トン、スッ。

江藤、一枚を持ち上げる。

灯りに透かす。

わずかに厚い。

江藤、眉をひそめる。

それを脇に除ける。

再び包丁を入れる。

刃の角度をわずかに調整する。

トン、スツ

トン、スツ。

薄い断片が、ボウルに静かに重なっていく。

×

×

×

水が入ったボウル。

何枚ものスライスが沈んでいる。

水は白く濁っている。

江藤、静かにボウルをかき混ぜる。

馬鈴薯の澱粉が抜けていく。

江藤、水を替える。

江藤、ボウルをかき混ぜる。

また替える。

何度も、何度も――

×

×

×

夜が白み始める。

キッチンペーパーの上にスライスされた馬鈴薯。

しっかり水気を取られている。

コンロの上に油の入った鍋。

江藤、じっと温度計の数値を見る。

一六〇度。

一枚、落とす。

静かな泡。

江藤、うなづく。

少しずつ投入。

ジュワアアア…

室内に心地よい音が満ちる。

江藤、菜箸で馬鈴薯を泳がせる。

色づいていく馬鈴薯。

淡い黄金色。

江藤、タイミングを見極める。

素早くすくい上げ、網に並べていく。

INT. 江藤の部屋 - 朝

窓の外。

朝日が昇っている。

机の上に銀色のアルミ蒸着袋。

江藤、ポテトチップスを丁寧に詰めている。

一枚も割れないよう、慎重に重ねる。

江藤、袋の空気を抜き、卓上シーラーで封を圧着する。

ぴたり、と閉じる。

袋の表面に、朝日が鈍く反射する。

江藤、袋を見つめ、小さく息を吐く。

江藤（呟く）

…よし

EXT. 街並み（2ヶ月後） - 昼

街路樹が赤く色づき、落ち葉が歩道に舞う。

人々の服装も、少しだけ厚手になっている。

SUPER

2ヶ月後

INT. 華の部屋 - 夜

華、息を殺してテレビの前に座っている。

ドラマ第1話が放送されている。

タイトルバックで 「リフレイン・グレープ」。

ワインの赤が画面いっぱいに広がる。

INT. テレビ画面（劇中画面）

主人公の寝室。

主人公、ベッドで目を覚ます。

外からクラクションの音。

主人公、起き上がり、カーテンを開ける。

窓の外。

朝日に照らされたワイン畑が広がっている。

その手前で、車の窓からヒロインが身を乗り出している。

ヒロイン、主人公に笑顔で手を振る。

INT.テレビ画面（劇中画面）

薄暗いワイナリー。

ワイン樽が並んでいる。

主人公、ブドウを握り潰すようにし、出来を確かめている。

INT.テレビ画面（劇中画面）

夜の葡萄畑。

主人公、かがみ込んで葡萄の実を確かめる。

突然、背後から何者かに襲われる。

倒れ込む視界。

INT. 華の部屋 - 夜

華、息を呑む。

画面から目が離せない。

INT. テレビ画面 (劇中画面・回想場面)

畑横の併設ロッジ。

主人公、粗末なベッドで目を覚ます。

INT. テレビ画面 (劇中画面・回想場面)

ワイナリーのテラス。

主人公と仲間たちの姿。

ワインボトルとグラスが並ぶテーブル。

ボトルは布で覆われ、ラベルが見えない。

一同、ワインを注ぎ、グラスを持つ。

主人公、一口飲む。

わずかに表情が動く。

仲間もワインも口に作る。

沈黙。

視線が交差する。

INT.テレビ画面（劇中画面）

夜の葡萄畑。

主人公、ヒロインと並んで歩いている。

突然、主人公、背後から何者かに襲われる。

叫び声。

視界が揺れる。

INT.テレビ画面（劇中画面）

主人公、ベットの上で目を開く。

荒い呼吸。

外からクラクションの音。

主人公、起きあがり、何かを確かめるように、恐る恐るカーテンを開ける。

窓の外には朝日に照らされたワイン畑。

その手前で、車の窓からヒロインが身を乗り出している。

ヒロイン、主人公に笑顔で手を振る。

主人公

…まただ

間。

主人公

前にも…こんなことがあった

INT. 華の部屋 - 夜

画面にエンドロールが流れる。

以下のクレジットが出る。

脚本 小早川桐子

脚本協力 江藤華

華、感極まる。

INT. スマホ画面 - 翌日

ネット記事に以下の見出し。

新ドラマ「リフレイン・グレープ」

二つのタイムループが交錯するストーリーが話題に

記事には高評価のコメントが並ぶ。

INT. 駅のホーム - 昼

華、スマホを操作している。

華、SNSで「リフレイン・グレープ パクリ」と検索。

華、指で画面をスクロールしていく。

それらしい投稿は出てこない。

華、ほっと息を吐く。

EXT. テレビ局・外 - 昼

江藤、粉砕機で馬鈴薯を砕いている。

江藤、小さくため息をつく。

INT. テレビ局・廊下 - 昼

華、歩いている。

華、以前よりもどこか垢抜けている。

スタッフ、すれ違いざまに頭を下げる。

スタッフ

先生、お疲れさまです

華

お疲れさまです

華、会釈を返す。

華、嬉しそうに微笑む。

向こうから江藤がやってくる。

二人、目が合う。

INT. テレビ局・食堂 - 昼

窓際の席。

華と江藤、向かい合って座っている。

華

なんか忙しくて、お礼ちゃんといえてなかったけど…ありがと。シナハン、手
伝えてくれて。江藤くんにはすごく感謝してる

江藤

いや、自分は全然…

二人の間に沈黙が流れる。

華、タイミングを探って、

華

実はね、今度、新しいドラマ書かせもらうことになって

江藤、顔を上げる。

華

ワンクールの深夜ドラマなんだけど。ラジオ DJ が主人公の話で

江藤

…

華

今度は…正真正銘、私のオリジナル企画

華、少し照れくさそうに笑う。

華

でね、石毛さんに、脚本は江藤くんと共同で執筆したって話したら、いいじ

ゃないかっていってもらえて

江藤（驚く）

え

華、江藤の反応を見て、

華（にやりと）

もしかして、覚えてないとでも思った？

江藤

…

華

私、こう見えても、結構義理堅いよ？

華、紙袋から馬鈴薯を一つ取り出す。

土のついた、ごつごつした馬鈴薯。

華、それを江藤に差し出す。

江藤、受け取り、馬鈴薯を見つめる。

華

どう？

江藤

…

華

人生相談を受けるラジオ DJ が、リスナーのトラブルに巻き込まれるっていう

展開で。基本的に1話完結だけど、全体のストーリーは一つに繋がってるって

いうか、そんなイメージかな？ 江藤くん、構成得意だし。一緒に書いてほし

いなって

江藤、馬鈴薯を見つめたまま、じっと目を閉じる。

言葉にならない感情が、胸の中でぶつかり合う。

江藤、目を開ける。

江藤、静かに馬鈴薯をテーブルへ置き、華へ返す。

華

…？

江藤、ポケットからハンカチを取り出す。

手についた土を、ハンカチで拭く。

華、はっとする。

江藤、椅子から立ち上がる。

江藤、無言で歩き出す。

華 (V.O)

バカ！

江藤、立ち止まる。

華、江藤の背中を睨みつける。

江藤に向かい、思い切り声を荒げて。

華

江藤！ 大バカっ！ あんたは絶対、脚本家になれない！

江藤

…

江藤、振り返らない。

江藤、そのまま歩き去る。

華、江藤の後ろ姿を寂しげに見つめる。

INT. 江藤の部屋・2週間後 - 朝

江藤（モノローグ）

プロットライターの期限は、せいぜい一年。そこで結果を出せなければ、また一からやり直し

テーブルの上に置かれたスマホ。

石毛との LINE 画面。

江藤が送った最後のメッセージは、未読のまま。

EXT. 江藤のアパート・ベランダ - 朝

プランターに乾いた土。

隣にゴミ袋。

江藤、ゴミ袋を開ける。

中には、いくつもの干からびた馬鈴薯が入っている。

江藤、しばらく見つめ、ゴミ袋の口を結ぶ。

ゴミ袋のアップに重ねて以下の SUPER

SUPER

企画書

INT. 江藤の部屋・台所 - 朝

台所脇の棚の上。

未開封のポテトチップスがいくつも置かれている。

江藤、ゴミ袋を持ってやってくる。

江藤、ポテチの袋を手で掴むと、ゴミ袋へ入れる。

江藤、次々とゴミ袋へと捨てていく。

SUPER

脚本

INT. 江藤の部屋 - 朝

江藤、スーツに着替えている。

テーブルの上のスマホが鳴る。

LINE の通知音。

江藤、スマホを見る。

LINE 画面に正田からのメッセージ。

正田のアイコンは、スーツ姿の写真に変わっている。

正田の LINE

「元気か？ 就活はどうだ？👉」

江藤、少し笑い、返信を打つ。

「まあ元気。周回遅れでキツイけど」

すぐに返信がくる。

「気にすんなって👉周回遅れの先輩として、色々教えてやるから😊」

江藤、打ち込む。

「頼りにしてるから」

返信がくる。

「俺に任せろ👊」

EXT. 江藤、アパート前 - 朝

江藤、リュックを背負って出てくる。

その両手には馬鈴薯とポテトチップスの入ったゴミ袋。

江藤、ゴミ袋をゴミ置き場へ置く。

江藤、そのまま立ち去ろうとして、足を止める。

ほんの少しだけ、名残惜しそうに袋を見る。

やがて前を向き、歩き出す。

秋の朝日が、長い影を静かに伸ばしていく。

(終)